

書評

松本厚治著『韓国「反日主義」の起源』

鄭大均（首都大学東京名誉教授）

ライシャワーの記述を想起

日本の韓国統治のテーマに、この本ほど肉薄した作品があっただろうか。そんな印象を与える本であるが、実は欠陥も少なくない。以下『韓国「反日主義」の起源』（草思社、2019年）を読んで感じたことを四点、記したい。

著者の松本厚治氏は、韓国が突出した反日の国でありながら、一方では「世界で最も日本に似た国」であることに注目する。「日本に似た国」になったのは、この国が日本統治期以後、「日本の制度文物を摂取」し続けているからであるが、しかしその一方でこの国が反日主義の国であるのはなぜか。この「反日」と「日本の取り込み」が同時進行することの意味を解明するのが、本書の課題であると著者はいうが（42頁）、それはエドウィン・O・ライシャワーの次の言葉を想起させる。

＜言語であれ、基本的な文化性向であれ、旧植民地であるだけに近代的な諸機構であれ、日本にいちばん近い国は韓国である。だが日本人と朝鮮人との間には、親近感も温かい感情も存在していない。後者にしてみれば、日本に植民地支配を受けた記憶が残っているだけに、日本への嫌悪感が育ち、それは教育を通じ、次の世代に引き継がれていく。

しかし日本への強い怨念と裏腹をなすのは、口には出さないが日本に対する尊敬の念である。彼らは日本に範をとることで、最高の敬意を払っている。

他方、日本人は朝鮮人を軽蔑する傾向がある。朝鮮は自分たちがかつて統治した後進国に過ぎず、日本在住の朝鮮人は厄介な少数派とみなされている＞（『ザ・ジャパニーズ』文藝春秋、1979年、416頁）

韓国人は日本への「強い怨念と裏腹」に「尊敬の念」を抱いていることを、ライシャワーが指摘したことの意義は大きい。韓国人と日本人の眺め合いや相互イメージに見てとれるアンビバレンスの性格は、無視・軽視されることが多いからである。

とはいえ、ライシャワーのアンビバレンス認識には不十分なところがある。「日本人と朝鮮人との間には、親近感も温かい感情も存在していない」とか、在日は「厄介者」と見なされているというが、韓国人（朝鮮人）の日本に対する眺めに親近感や温かい感情を指摘するのは困難ではないし、日本人の在日に対する眺めには早くから「犠牲者」のイメージもあった。『ザ・ジャパニーズ』の原書が刊行されたのは1977年であるが、その時期には在日に対して「厄介者」と考えること自体が、すでに政治的には正しくないと言われる時代だったのである（「日韓を不幸にする『罪の政治学』」『月刊Hanada』2019年9月号参照）。

言い換えると、日韓の眺め合いをテーマにした戦後の議論は、このアンビバレンスの一方にのみ依拠して日本の加害者性や差別性を語ろうとした。この分野を代表する旗田巍、梶村秀樹、和田春樹、高崎宗司といったリベラル系研究者たちは、たとえば日本統治期の韓国人の思考や感情を語るとき、韓国人の日本に対する「恨」や「抵抗」は語っても、「憧憬」や「協力」や「暗黙の了解」を語ることはしなかったのである。日本に対する「尊敬の念」に言及したライシャワーの指摘は、その意味で貴重である。しかし、そのアンビバレンス認識は限定的である。では韓国人の反日をテーマにするこの本で、著者の松本厚治はアンビバレンスの問題にどのように取り組んでいるのだろうか。それについては後述したい。

斬新な記述

先に記したように、本書は韓国人の日本統治体験に肉薄した作品であり、したがって読者には、まずはその洞察と感情の見事な調合の文章を味わって頂きたいと思う。たとえば、日本統治が韓国の地に与えた影響についての記述。

＜人口は長い間停滞を続け、二〇世紀初頭には一〇〇〇万人程度だったと推定されているが、併合後年率二パーセントの増加に転じ、解放直前には二五〇〇万人に達した。これは人口爆発とも言えるもので、おもに食糧生産の増大と、衛生の改善による死亡率の低下が、一時に生じた結果である。＞

人口は激増したが、経済規模はそれを上回る速度で拡大した。一九一〇年から一九四〇年まで、一人当たり実質所得は年平均二・四パーセントの割合で増加したが、これは当時の世界では突出した実績と言える。生活水準の持続的向上は、栄養摂取、識字率、死亡率の変化の分析によっても裏づけられている。(略)

工業の発展はめざましく、一九一〇年から一九四〇年までの年平均生産増加率は一〇パーセントに達した。日本時代晩期には工業生産は農業生産を上回り、しかもその半分を重化学工業が占めるという、モノカルチャ経済の対極ともいえる経済構造が形成されていた。一九二〇年代後半からは、鴨緑江水域で大規模な水力発電所が次々と建設され、豊富な電力を基盤に化学工業を中心とする一大工場群が出現した。同時代の経済学者印貞植は、北鮮は全日本に誇る工業地帯に転化したとし、これを歴史的壮観と形容している。

工業化のおもな担い手になったのは日本人だが、彼らは、熟練と勤労精神をたずさえてフランスから欧州各地に散らばったユグノーのような役割を果たした> (239～240頁)

これは日本統治のインパクトについて記された最も端的で、説得力のある記述である。この時代の日本人の役割をユグノーに譬えるという斬新さにも注目したい。実はその種の斬新さに随所で出会えるのが、本書の楽しみである。

＜世界史的に見て、異民族支配が抑圧を伴わなかった例はまずないだろうし、戦前の朝鮮が例外だったはずもない。しかし日本の支配は、二〇世紀に出現した全体主義のよう

な、過激なものではなかった。深夜私宅にやってきて拉致していく秘密警察や、強制収容所のようなものがあったわけではない。銃撃戦で死んだ義兵、裁判で死刑を宣告された殺人犯はいるが、独立運動をしたというだけで「消された」人の話は耳にししない。国家の政策としての殺人は、日本帝国が知らないものだった> (221頁)

<「教科書」〔韓国の教科書を意味する。以下同〕は激烈な独立戦争が戦われたとしているが、(略) 当時の日本には朝鮮と戦争しているという認識はなく、駐屯兵力は(第二次大戦末期を除き) 概ね二個師団を超えることはなかった。人口・単位面積あたりの警官の数も内地より少なかったが、治安に問題はなく、官吏や軍人、その家族も、くつろいだ気分で日々を送っていた。東トルキスタンやチベット、かつての北アイルランドやチェチェンなどとは、全然違う状況にあったのである> (119~120頁)

辛辣な記述にも陳腐さはない。

<第一次大戦後のハンガリー、第二次大戦後のオーストリアのように、負けた大国(ハプスブルク帝国。第三帝国)に包摂されていた国民は、自分たちは侵略の犠牲者だとひたすら言いつのつた。韓国も同じで、戦勝国側に「共犯」とみなされれば国をあやうくする。戦後の国際秩序のなかに居場所を見つけようとする国にとって、被害者の席にもぐり込み、日本非難にまわる以外に選択の余地はなかった。

むろん、それは容易なことではない。連合国に向かって、われわれは貴国とともに敵国日本と戦ったと、胸を張って言える立場にないことはわかっている。(略)

戦ったことはたしかだが、この国の人々は「日本と」ではなく、「日本とともに」戦ったのである> (522頁)

<伝統はあらかた消滅した。残るのは近代化伝統くらいだが、親日派や日本人がかかわった、表に出せない闇の伝統として意識から消されていった。結局、自覚的に継承される生きた伝統がない。

それを端的に示しているのが、この国における右翼の不在である。日本で右翼といえば、誰もが天皇を想起するだろう。皇室への尊崇の念を欠いた右翼というものは、現実には考えがたい。君主国では王党派が右翼となる。イスラム国家やイスラエルのように宗教を基軸におく国では、その厳格な実践を求める党派が右になる。(略)

韓国には執権者や与党はいるが、国家的伝統に拠って立つ本来の意味の右翼が見出せない。見出せないという以前に、そもそもこの国の右翼とは何か、イメージできない> (537~538頁)

地政学的議論

ときおり展開される地政学的議論も啓発的である。

<今日中国は、内モンゴルやチベット、ウイグルの住民を中華民族と呼び、その地を不可分の国土と称している。儒教や漢文、科挙とは無縁の、チベット仏教やイスラムの地が中国なら、制度文物をことごとく華制に従ってきた「小さな中国」は、なおいっそう中

国だろう。孫文はその主著『三民主義』で、朝鮮を「失われた中国の地」とさりげなく書いている。辛亥革命のもう一人の立役者章炳麟は、チベット、回部、蒙古は住民にまかせてよいが、朝鮮とベトナムは必ず回収しなければならないと説く。この線引きが今日逆になっているのは、後二者が帝国主義国に一度支配され、中国から切り離されたこと以外に、理由らしい理由はない。

中華の大国と個々の属邦の力の差は大きく、これまでのところ自力で独立できた国はない。四分五裂になって崩壊したオスマン帝国と異なり、漢民族が人口の大半を占める中国は決定的な分裂に至ることなく、外侵や内戦で窮地にあったときでさえ、属国の離反を効果的に阻止してきた。インドシナ三国にせよ、ビルマ、モンゴル、台湾にせよ、今独立の実態のある国は、いったん第三国の支配下に入った地域ばかりである。帝国主義国の力で中国の鉄の抱擁をふりほどき、しかるのち独立する。朝鮮もそうした国の一つだったのであり、そのような歴史をもたなかったチベットやウイグルは、今なお中国の圏域にとどまっている。

「教科書」は国民がある日自覚して、にわかに独立の国ができたかのように書いているが、ありえない話である。朝鮮王国の財政規模は江戸幕府の一割にもならず、維持できた軍隊は結局万の単位になることはなかった。小国でも、武勇に秀で凝集力に富む国民なら、あるいは大国に対抗できたかもしれないが、そういう国柄でもない。この国が独立するには、実際の歴史がそうであったように、日本の力を借りるしかなかったのである>(441~442頁)

思いがけない引用に遭遇することもある。

<「教科書」は、大韓帝国が国民の自覚と国際世論に支えられて成立したと書いているが(略)国際世論とは何のことだろう。中国人は属国の喪失を心外に思っていたし、当時ロシアの新聞は、朝鮮の領有はロシアの権利であり義務でもあると書きたてていた。世界は切り取り御免の潜在植民地だというのが一九世紀の欧州大陸の感覚で、白人種の優位が臆面もなく語られていた時代に僻遠のアジアの国の独立を支持する「国際世論」など、あるわけがない。

自覚・世論などと能天気なことを言っているのは、中国の支配から離脱する困難から目をそむけているからである。朝鮮を属国として保持しようとする中国の意思は固く、日本と戦ったのも要はそのためである。敗戦の結果は一応受け入れはしたものの、これを国恥とみなし、そのような認識を国民に植えつけようとしていた。一九二〇年代末の中華民国の学校教科書『国恥読本』にある「ずるい隣の子」という小話は、次のようなものである。

「私の弟はきれいな花柄のゴム毬を持って、いつも空き地で楽しく遊んでいた。ある日東隣りの子が来て遊ぼうというので一緒に遊んでいると、その子は毬を二人一緒のものにしようと言い出し、弟が家に持って帰るのを承知しない。弟が言い返すと、足で蹴っておどかした。その子は毬を横どりするつもりで『お前の家に持って帰るなよ、俺もいらなけれどね』と言って、毬を自分の家の屋根に放り上げたので、弟はくやしさをこらえて家に帰った。何日かして弟がその子に会ったら、手に毬を持っていた。屋根に投げた、あの毬だった」

もとは中国のものだったのに、共有しようと言いだし（天津条約）、「朝鮮は自主の国」と念仏を唱えながらひったくり（日清戦争）、最後には自分のものにしてしまった（日韓併合）。中国は弟、日本は隣りの子、朝鮮は毬^{まり}にたとえられている>（436～437頁）

昨今、話題になる徴用のテーマについての記述もバランスがよい。

<資源を略奪したともいえない。一部の鉱物を除けばもともと天然資源はあまりないし、一九三〇年代以降は内地との移出入は工業国間の貿易に近いものとなっていた。労働力の徴用は、徴兵で労働力が不足するようになった戦争末期に行われたもので、それまで日本政府は、内地の高賃金を当て込む朝鮮人の移住に歯止めをかけようとやっきになっていた。当然のことながら、同じ国なのになぜ自由に内地に行けないのかという不満が生じ、総督府もそれには一定の理解を示していた。これが基本的な構図である。徴用は総力戦体制下で内地人をも対象として行われたことで、植民地的略奪の文脈でとりあげるの^は適当とはいえない>（237頁）

ときおり海外の研究に言及されるのも良い。

<韓国開発研究院とハーバード大学国際開発研究所の共同研究『韓国経済社会の近代化』（一九八〇年）は、日本の統治は近代的経済発展の礎石を置いたもので、戦後の南北分断のような災厄と同列にはおけないとしている。（略）

バランスのとれた工業化が進行し、道路、鉄道、電信、港湾のインフラが整備され、植民地型経済とは異質の経済が形成されていた。農業も同様で、戦後多くの発展途上国が取り組んだ「緑の革命」はすでにこの時代に達成されていたという。コーリ（プリンストン大学教授）は、かつて欧米の植民地だった国で、当時の朝鮮なみの水準に達した国は今なお存在しないのではないかと述べている。（略）

日本は朝鮮を内地の延長とみなし、名実ともに自国に統合することを目標にして統治した。半島を収奪して低い水準にとどめおく政策は、九州を搾取して本州を富ませるのと同様、意味のないことである。身分制の撤廃、殖産興業、教育の普及、土地調査など経済社会の改革に熱心に取り組んだのは、日本自身の観点からも必要なことだった>（262～264頁）

「親日派」という用語

とはいえ、この本には欠陥もある。言葉の不用意な用法が折角の命題に傷をつけているというのもその一つで、とりわけ批判に値するのは「親日派」の用語であろう。この語を著者は「日本と親密な関わりを持った人々」（43頁）というほどの意味で使う。だが、この語は韓国ではしばしば、「売国奴」や「非国民」の意味で使われるものである。「親日派」とは反日主義の側が作り出す「敵の顔」であり、それは否定的ラベリング（レッテル貼り）であって、社会的実体を意味するわけではない。反日主義者は「親日派」を糾弾することによって、自らの輪郭を確かなものにしていくのだ。

だから、本来なら不用意に「親日派」などという用語を使うべきではない。ところが松本氏はそれをかなり多用するのだが、その結果何が起きているかという点、「親日派」の語彙がその通俗的用法やステレオタイプに融合し、反日主義者の意のままに松本氏の文も読まれてしまうという危険性である。

＜早世した人は別として、世に知られた民族主義者で主義主張をまっとうした人は皆無と言ってよい。重要人物のほとんどが親日派なのは、歴史の真相が親日史だったからである＞(126頁)

＜研究が進むほどに、朴正熙政権の登場こそ、戦後経済史の分水嶺とみなさざるをえない。果敢な決定、実用主義、日本モデルの追求などに特徴づけられるこの時期の韓国国家の行動は、朴正熙の個性を外部に投影したようにさえ見える。彼は現代史の大人物であり、無視することは不可能である。しかし、その出自が真っ黒な親日派なのである＞(279～280頁)

もっとも松本氏は、「親日派」の通俗的用法の否定性に無知なわけではない。実際にそれを批判する箇所もあるのだが、しかし次のような文に遭遇すると、著者の「親日派」という言葉に対する無頓着ぶりは、氏の民族問題に対するセンスの欠如に由来するのではないかと思えてくる。

＜親日派という言葉は、当時を生きた人々の実像、さらに言えば日本統治下で進行していた事態を、全面的に隠蔽している。彼らは日本に親しくしたのではない。日本人だった。こう言いきるのが不都合なら、「日本に精神的故郷をおいた」「九割方日本人」だったと言ってもよい。日本人が日本人として進退したことを、今の物差しをあてて「親日した」と言っているのである＞(134～135頁)

似たような文をもう一つ。

＜併合後は、生活や意識の日本化が進んでいく。七〇万を超える在鮮日本人の多くが日本式の家を建てて住んだため、まずは住生活に影響が及んだ。(略)日本時代の晩期には日常生活のすみずみが内地同然となり、人々の風貌、物腰まで内地人と区別がしにくくなっていた。日本はもはや抵抗したり協力したりする外国ではなく、かなりの程度自らの内にあるものだった＞(129頁)

こうして見ると、「彼らは日本に親しくしたのではない。日本人だった」の文が、単に勢いにまかせて書かれたものではないことが分かる。松本氏に欠けているのは、おそらくは次の視点ではないだろうか。つまり、この時代の朝鮮人は、たとえ日本文化のなかで自己形成し、一見日本人らしい生活をしていても、自分が本物の「日本人」でないということを知っている限り、ある条件が与えられると、朝鮮人として振る舞うことができたのだという視点である。エスニック・アイデンティティの機微に関わる視点である。当時の朝鮮人のなかに日本文化に同化し、日本人化していた人間がいたのは事実であろう。し

かし自分が本物の「日本人」でないことを知っている限り、彼らは民族主義者に豹変することもできるのである。

それにしても、「親日派という言葉は、当時を生きた人々の実像」を隠蔽しているといながら、その言葉を使い続けるのはなぜなのか。冒頭で筆者は、韓国人と日本人との間の眺め合いやイメージに見てとれるアンビバレンスの重要性を指摘したが、こうして見ると、本書に欠けているのもアンビバレンスの視点ということになるのではないだろうか。人間の意識や認識やイメージを語る時、私たちはその移ろいやすさやアンビバレンスの性格を無視してはいけない。そのことに無関心のままに議論を進めると、議論そのものが当事者にはうわの空のものになる。

＜「日帝は極悪であり、韓民族はそれと激越に戦った」という命題と、「その日帝の手先となった親日派を、光復後指導者に戴いた」という命題を両立させる仮設は、結局見出せなかった。両立しないのであれば、いずれかを採り、他を棄てるしかない＞(94頁)

たしかに二つの命題は韓国社会に広く流通し、それは韓国人の心に内面化されているものであるだろう。しかし人間の意識や認識やイメージにはアンビバレンスがあり、だから権力者たちの政治的プロパガンダは意味を持つのだ。「日帝は極悪であり、韓民族はそれと激越に戦った」との命題は、その種の繰り返されるプロパガンダの産物であろう。しかし、だからといって、それにとって代わるもう一つの思考や感情が不在というわけではない。今は声を発することはしないが、心の周辺にはいつの日か、舞台の中央に駆け上ることを夢見るもう一つの思考や感情も待機しているものであり、今、心の中心を占めている意識や感情とは真正のものでもあるが、仮性のものでもある。拙著『韓国のイメージ』『日本のイメージ』（いずれも中公新書）は、そのような視点で書かれた日韓の眺め合い論であった。

文化論の危うさ

最後に、松本厚治氏が本書でとり組んでいるアウトラインについて一言したい。「序」には次の文がある。

＜近代以前は中国の属国で、伝統文化の実体が中国文化だったこと、その状態に終止符を打ったのが日清戦争だったこと、その後日本を範型として民族の枠組みが作られ、大量に持ち込まれた日本の制度文物が国の新しい伝統となったこと、抗日は終始低調で、併合後は日本国民としての意識が徐々に定着していったこと——筆者には自明と思えるこれらのことに正面から向き合った研究は、今なお容易に見出せない。朝鮮半島の人々の耳にさからうと思えば、何事であれ腫れ物にさわるように接する。学術の分野だけでなく、日本の言論空間の総体がそのようにできている＞(10頁)

おおまかにいえば、上に記されていることを証明するために本書は記されたのであり、そのことは本書が基本的には文化論の性格をもつことを教えてくれる。しかし、その文化

論には危うさがある。著者は、たとえば「近代以前は中国の属国で、伝統文化の実体が中国文化だった」というのは自明に思えるという。ここでいう「伝統文化」とは、思想や文学といった文字を媒介にして継承される「大伝統」を意味するもので、口承で伝わるローカルな文化である「小伝統」は国を定義できるものではないという。

はたしてそうだろうか。近代以前に韓国が中国との冊封体制のもとで、君臣関係にあったと考えるのはよい。半島に儒教や漢文の教養やライフスタイルを志向する両班階層がおり、彼らが中華の大伝統を継承する人々であったというのもよい。しかしこの国には中華文明とは異質の常民的、シャーマニズム的文化の伝統もあったはずであり、そのことを無視して「伝統文化」を語るのをおかしくないか。言い換えると、韓半島は中華文明の分身的存在でもあったが、中華文明に同化されることのない、独自の民族文化が維持される地域でもあった。ところが松本氏は、両班階層の文化は語っても、常民階層のことは語らないのだが、それでいいのだろうか。

致命的なのは、「小伝統がつながっていても、それで国は定義できない」（339頁）という思い込みであろう。なによりもこの地域の文化を語るに、固有の言語があり、驚くほどの均質な文化や民族が形成される過程をこの地域が経験したことを無視する態度がおかしい。初めから均質的ではありえなかったにしても、この地域には古くから固有の言語を話す人々があり、その話し言葉こそが半島を中国から分け隔てた、最も本質的な要素と考えていいのではないか。ところが松本氏は、書き言葉の文字には注目しても、話し言葉には関心を寄せない。重要なのは、かつてグレゴリー・ヘンダーソンが指摘した次の視点ではないだろうか。

＜朝鮮が政治学者に重要視されるのは、その人口の大きさとか地理的位置だけではない。朝鮮における政治形態の趨勢、すなわち農業を基盤とする（都市国家型ではなく）中央集権的寡頭政治への傾向は、世界でもまれに見る例である。朝鮮ほど安定した版図の中で、これほど持続した政治的わく組のもとに、これほど画一的な民族、文化、言語の環境の中で、これくらいの大きさの国に根を下ろした伝統はその類例がない、また地方勢力を朝鮮ほど芽のうちに完全につみ取り、中央支配を長期にわたってゆるぎなく持続した国も数少ない。朝鮮という温室は、その特主こそ何代も代わったが、室温は概して一定であったということができよう＞（『朝鮮の政治社会』サイマル出版社、1973年、2頁）

本書は日本の韓国統治のテーマに肉薄した作品であり、その一次資料には豊かさがああり、著者には自国に敬意を抱くという健全さがああり、したがってときには韓国の日本に対する偏見や歪曲に怒りも見せてくれる。しかも著者には、並みの保守派には期待できない国際感覚があり、良い日本語を使い、巧みな比喻を操作する人でもある。

しかしそれが韓国には伝統がないのだとか、そのような国は「他に容易に見出すことはできない」ということを証明するための作業であるとする、この本はとんでもないエネルギーの無駄遣いをしている、ということになる。たとえばアジアには、二〇世紀に文字の変換を経験したインドネシアやベトナムやモンゴルのような国があるが、それらの国における伝統の断絶は、韓国のそれに比べると無視できるものだろうか。「小伝統がつながっていても、それで国は定義できない」というが、それでは、ベネディクト・

アンダーソンが『増補 想像の共同体』（NTT出版、1997年、97～98頁）で言及する、「南アメリカの新生共和国が、かつてはそれぞれ、一六世紀から一八世紀にかけて行政上の単位であった」という事実をどう考えるのか。イベリア半島出身者によって形成された南アメリカにおける行政単位はかなり偶然的、恣意的なものであったが、それでもやがてベネズエラ人もコロンビア人もエクアドル人も、自国に愛着を寄せるようになるのである。アーネスト・ゲルナーがいうように、ナショナリズムとはもともと存在していないところに国民を発明することではなかったのか。

そもそも日本や韓半島にある二つの国を除くと、世界の多くの国は多民族、多言語、多文化社会であって、「自国的なものがそもそも伝統でないという認識が成り立つ国」どころか、自分の所属する集団の言語や文化や宗教が、国家のそれにほとんど何も反映していないという例だって少なくない。本書の出だしの部分で著者は、韓国史が東欧史に似て、歴史の自己完結性が低いことを指摘している（17～18頁）が、その視点はどこに消えてしまったのだろうか。